交わる無限の哀色世界～テイルズオブエクシリア～<チャット>

月詠輝夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
交わる無限の哀色世界～テイルズオブエクシリア～＞チャット＜

【Ｎコード】
Ｎ０９６７Ｘ

【作者名】
月詠輝夜

【あらすじ】
本編のチャットです。
会話文のみとなっております。

本編です→ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０６８３ｘ／

年齢は？

～キジル海漠にて～

アル「ところでさ、ヴェリテって歳いくつなのよ」

『それを仮にも女の子に聞くなんてどうかと思うけど』

アル「仲間のことを知っておきたいっていう俺の好奇心」

『仲間、ねぇ…』

アル「で、そこんとこどうなの？」

『……１６』

アル「１６！？　はー…ジュード君より年上だってぇのに、あの巫女殿は…」

『聞いておいてそれか』

アル「いいや？ちゃんとヴェリテのことも考えてるぜ？歳のわりにしっかりしてるし、何でも出来るし。それに美人でいて可愛いし」

『…女ったらしと言われない？』

アル「否定はしないな」

ただし人間関係に置いてはダメダメなヴェリテです。

丸焦げ

～サマンガン海停
翌日の宿屋にて～

ジュ「ヴェリテ、昨日はあの後大丈夫だったの？」

『ん？あぁ、しばらくしたら落ち着いた。だから問題ないわ』

ジュ「ごめんね…」

『？　なんでジュードが謝るの』

ジュ「僕も触れられる距離にいたから…」

『だから気にしてないってば。ああ、良かったらあいつに伝えておいて。次、不用意に近づいたらイラプションで丸焦げにするからって』

アル「聞こえてるしそれにそんないい笑顔で言わないでくれ」

『あら、遠慮しなくていいのよ』

心はきっと許してない気がする（笑）

無防備

～サマンガン街道にて～

アル「おーい、ヴェリテ…って寝てらぁ」

ジュ「ヴェリテがこんなに無防備に寝てるなんて珍しいね」

ミラ「仕方なかろう。人間にとってもマナは必要不可欠なもの。それをギリギリまで失ったのだ。無理もない」

エリ「ヴェリテ…わたしを守らないと、って言ってました…」

ティ「強い精霊術ばかり使ってたよー」

ジュ「無茶して倒れたら元も子もないのに…」

ミラ「……」

アル「どうした、ミラ」

ミラ「あ、いや……ヴェリテは無茶をすることはあってもこうやって人間を守ったことはなかった。だから少し驚いたのだ」

アル「なるほどね。でもそれってエリーゼ限定だろ」

ミラ「ふむ、確かに」

ジュ「それ、ヴェリテにとったら確かな第一歩だと思うよ。ヴェリテ自体が変わろうとしてるならね」

アル「まずは俺たちと並んで歩けるようにはしてもらわなきゃなぁ」

エリ「みんな友達だから仲良く、ですね」

アル「でもヴェリテにとって俺とジュード君はただの知り合いって感じだけどなー」

ティ「もっと積極的にいけばいいよー」

アル「今度不用意に近づいたら丸焦げにされるんだけど」

『ん……っ』

アル「おっと。起こしちまうのも悪いし、静かにしようぜ……ったく、ほんとに無防備だよな」

エリーゼを守ろうとするヴェリテ。
自分でもわからないくらいにエリーゼを守らないとと思っている。
あとヴェリテは容赦ないです。

よく見てる人

～カラハ・シャール広場にて～

エリ「わー！おっきな風車ー…」

ティ「すごいねエリー！」

『あまりはしゃぐと転ぶわよ』

エリ「大丈夫ですよー」

アル「ん？…ヴェリテ」

『？　どうかした？』

アル「いや、なーんとなく感じたんだけどさ。微妙に俺たちと距離、近くなってない？」

『……見間違いよ』

アル「そうかぁ？ほら、いつもはもう三歩くらい後ろじゃね？」

『そんなこと、何で分かるのよ』

アル「それとなく見てるから」

『……やめてよね』

アル「あれ？怒った？」

ミラ「あれは所謂照れ隠しというやつだろう。本に書いてあった」

ジュ「ヴェリテが照れ隠しするような性格だとは思わないけど…」

アル「あんまり本人が近くにいるときにそういう話しない方がいいぜ」

『もう、いいわよ……』

いつかデレさせるんだ！

お人好し青少年

～カラハ・シャール広場にて～

ジュ「あの、ヴェリテ」

『何、ジュード』

ジュ「ずっと思ってたんだけどさ、ヴェリテって何食べてるの？」

『は？』

ジュ「いや、だっていつも食事どきになるとどこか行って、帰ってきたと思ったらもう食事を済ませているから…」

『…保存食』

ジュ「そう、なの？」

『心配しなくても自分で作った料理を保存してその都度食べている。わたしはわたし以外の人間を信用していないから』

ジュ「…僕のことも？」

『そうなるわね。信用していないし、頼ってもいない。利用できる

ものは利用するだけ』

ジュ「じゃあエリーゼも？」

『…あの子はわたしと境遇が似てたから、守らないととは思ってるのかも。でも信用してると言えば嘘になる』

ジュ「…ヴェリテがそう思ってるのはだいたい分かった。でもね、ヴェリテ」

『……何？』

ジュ「利用されてるってことを、僕は信用されてるってそう感じるんだ」

『なに、それ……』

ジュ「勝手だとは思うけど、ね」

『ほんと、勝手よね。まあ、別にわたしにはメリットデメリットもないし。……そう思ってればいいんじゃない？』

ジュ「うん、そうする」

『…なんか、負けた気がする』

ジュードのお人好しパワー全開（笑）

わたしの将来の夢

～スキット：大きくなったら、の後～

『エリーゼはお嫁さんになりたいの』

エリ「きっ聞いてたんですか！？」

『女の子らしくて素敵な夢じゃない。わたしは好きよ、そういうの』

エリ「…は、恥ずかしい、です…」

ティ「ヴェリテ君も大きくなったらお嫁さんになるのが夢なのー？」

『お嫁さ…いやいや、女の子みんながみんなそういうわけじゃないからね』

エリ「だったら、ヴェリテの夢ってなんですか…？」

『夢、か……今まで考えたことなかったなぁ』

ティ「じゃあお嫁さんでいいじゃんー！エリーと一緒だよー！」

『なんでそうなるのよティポ』

エリ「わたしも、ヴェリテと一緒がいい…です。ダメ、ですか……？」

『ううん全然！……じゃあちょっとだけ夢見てみようかな』

エリ「きっとヴェリテは凄く綺麗な花嫁さんになります！」

ティ「なんたってヴェリテ君はバリボーだからね！」

『バリ……なに？』

ティ「バリボーだよー！」

『…良くわかんないんだけど。ならエリーゼは特別可愛い花嫁さんになるわね』

エリ「そんな、わたしなんて…」

ティ「エリーはすっごく可愛いよ！」

エリ「ティポまで…っ」

『こんな可愛い花嫁さんをもらえる人は羨ましいなぁ』

エリ「！！！！　きゃー！」

『…可愛いのは本当なのに。逃げるとこがまた一段と可愛いなぁ』

アル「おたく、エリーゼ姫の前だと性格一変するのな」

『……エリーゼは、違うから』

アル「ふぅん」

ヴェリテはエリーゼと大の仲良し。
いつの間にかエリーゼとは零距離。
ヴェリテ自身もビックリしてます↑

変わった？

～バーミア峡谷にて～

『あー…ここ登るのかぁ』

ミラ「そうか。お前は…」

『心配しないで。大丈夫よミラ』

ミラ「む。そうか？」

『だってわたしだけ怯えてるなんてカッコ悪いじゃない。だから気にしないで。ミラは前だけ見ていて』

ミラ「…ふ。ヴェリテには負けるよ」

『気が強いのがわたしですから』

ミラ「変わったな」

『え？変わった？どこが？』

ミラ「そうだな…これは雰囲気というやつか」

『雰囲気…？』

ミラ「……先程、カラハ・シャールでアルヴィンとなにかあったか？」

『な、何で……？』

ミラ「……いや、なんでもないよ」

『…可笑しなミラ』

ミラ「ふふ、さぁ、行こうか」

『うん』

一番近しいミラがヴェリテの変化にいち早く気付くと思います↑
しかし本編の夢主の性格が迷子になってきたよあわわ（汗）

ヴェリテの精霊術

～帰りのクラマ間道にて～

ジュ「そう言えばヴェリテ、さっきの補助術凄かったよね」

アル「あー、あれは確かに驚いた」

ミラ「ヴェリテは回復術が出来ない変わりに補助術が優れているんだ」

アル「へえ。初耳だな」

エリ「すごく力が沸いてきたような気になりました…」

ティ「めっちゃ強くなった感じだったねー！」

ロー「ここまでの精霊術、見たことがありません。補助術だけでなく、他の術もかなりのものと見られました」

ミラ「ニ・アケリアにいた頃より遥かに強くなってるな」

アル「旅してる間に鍛えられたんじゃねえの？ま、体力は全然らしいけど」

『あのさ、本人がいるとこでそーゆーの止めてくれない！？恥ずか

しいし、あなたのは失礼だし！』

アル「そーゆー割には照れてるように見えないけど？」

『当たり前じゃない。わたしが照れたらキャラじゃないもの』

ジュ「キャラって、何それ…」

『あら、ジュードにもキャラはあるわよ。ジュードが男らしかったら萎えるもの』

ジュ「それ酷くない！？」

『冗談よ』

ジュ「……」

『話が脱線したわね。さ、早くカラハ・シャールに戻りましょう』

ヴェリテの精霊術は回りからみたら多分凄いんだと思う←
因みに精霊術はミラと同じように無詠唱で放ってます。

認め合うふたり

～ガンダラ要塞での
初めての戦闘後にて～

『そう言えばミラとふたりだけで戦うのは初めてね！』

ミラ「ふむ。確かにそうだな。さしの勝負はしたことがあったのだが」

『でもあの時のミラ、容赦なかったよね……最大限の力使ってさ。完璧瞬殺だったわ……』

ミラ「しかしヴェリテの術に対抗出来るのはあいつらの力を借りるしかないと思ったのだ。お前の補助術はかなり精度がいいからな」

『そうかなぁ……でも、ミラが本気で戦ってくれたのは嬉しかった』

ミラ「謙遜しすぎだ。もっと自分の力に自信を持てばいい。私はヴェリテの力を認めているからこそ、本気を出したのだ」

『ミラ……うん、ありがとう。わたしもミラの実力はちゃんと認めてるよ。力を失った後も、こうやって強くなってるんだから』

ミラ「ありがとう、ヴェリテ」

『もっとミラの役に立てるように、頑張ってサポートするから』

ミラ「ああ。頼りにしている」

四、五年前、ヴェリテは四大様たちにボコられました↑

縮まった距離

～シャール家にて～

『ジュード、あの、昨日はごめんなさい』

ジュ「え？昨日……って」

『……ほら、ジュード…』

ジュ「！！！！　べ、別に気にしてないよ！大丈夫大丈夫！」

アル「あれ？優等生顔真っ赤なんですけど。巫子姫様に何されたの？」

ジュ「な、何もされてないって！」

『……抱きついて泣いただけよ』

ジュ「ヴェリテ！！」

アル「抱きついて、泣いた……？ヴェリテが、か？」

『……わたしだって、泣くわよ。人の子ですもの』

ジュ「ヴェリテ……」

『生まれて初めて泣いたの……』

ジュ「ずっと我慢してたんだね」

『我慢……っていうか意地かな。ほら、わたしってプライド高いでしょ？』

ジュ「でもちょっといいもの見れた気がしたよ」

『えええ……う…、まぁスッキリしたからいいとしときますか。……ジュード、慰めてくれてありがとうね』

ジュ「どういたしまして」

アル「ふーん、ふーん……」

ジュ「あっちょ、アルヴィン！？」

『ん？え、……怒って…た…？』

ジュ「なんで？」

『…さぁ…？』

アル「あれ、何で俺逃げたんだ？」

ふたりがいつの間にか仲良くなったのを見てアルヴィンさんが軽い嫉妬……なのかなこれは……（^p^）↑
うーん…嫉妬だったらいい↑↑

世界は繋がっているから

～シャール家にて～

エリ「ヴェリテ…」

『ん？どうしたの、エリーゼ』

ティ「眠れないのー」

『そっか……そう言えば明日にはお別れだもんね……一緒に寝る？』

エリ「！　うん！」

ティ「わーい！ヴェリテ君と一緒ー！」

『ふふ』

エリ「ヴェリテは、もう大丈夫ですか……？」

『そうね……大丈夫といえば大丈夫。大丈夫じゃないといえば大丈夫じゃない』

ティ「つまり分からないってことー？」

『ええ。……未だにね、ちょっと自分を責めてるの。プライドが高い所為でミラの命令を破れなかったから』

エリ「ヴェリテは悪くない、ですよ……ミラも、悪くないです…」

『ありがとう、エリーゼ。……わたし、ふたりについていって、自分自身を変えられたらって思うの。実際、ミラたちといてわたしは少しだけだけど前に進めたから』

エリ「やっぱり…お別れ、なんですね」

ティ「むぅー…」

『……。ねぇ、エリーゼ』

エリ「？」

『わたしも、エリー、って呼んでいい？』

エリ「！　も、勿論です！すごく……嬉しい、です」

『エリー…わたし、エリーもティポも好きよ。だからふたりには幸せになってほしい……わたしだってずっと一緒にいたい。でもね、これから先、会えないってわけじゃないわ。世界は繋がっているから、どこにいたって会いに行けるのよ』

エリ「幸せに……繋がってる…」

ティ「また、会える…」

『エリーとティポが願うなら』

エリ「はい……」

ティ「絶対に会いに来てねー。ぼくたち待ってるからー！」

エリ「わたしたちは友達、です」

『うん、友達よ』

エリーゼとさらに仲良くなりました↑
ヴェリテもエリーゼとティポに癒されて元気になればいい。
しかしうちの子は立ち直りが早い気がする……気のせい？

回復術と才能

～サマンガン街道にて～

『エリーの回復術が恋しい。グミとか食べるのめんどくさい！』

ジュ「あはは……」

『仕方ないとは言え、唯一の回復技持ってるジュードは戦闘に参加出来ないし！』

ミラ「まあそれは仕方ない」

『エリーの才能ってほんとに凄いわ……わたしも回復術使えるようになりたい……！』

ジュ「うーん…ヴェリテ程の霊力野を持ってるなら使えてもおかしくないんだけどな…」

『悔しいけど、才能がないんでしょうねー…』

ミラ「あまり気に止むな。お前の補助術は役立っている」

『あは、ありがとうミラ。んじゃ、もうちょっと頑張りますか！』

ジュ「何て言うか……単純？」

ミラ「たまにイバルと似てるところが出てくるな」

ジュ「でもヴェリテにはヴェリテの魅力があるよね」

ミラ「ああ。あいつはなんにでも一生懸命で、絶対に自分の意志を曲げないんだ」

ジュ「うん。ヴェリテらしいね」

『聞こえてるし』

回復術だけじゃなくてエリーゼ自身も恋しいと思うよ、ヴェリテは。
ちょっと変わってきてるヴェリテ。
あれ？キャラ崩壊して、ないよね↑

苦労人の妹

～サマンガン海停にて～

『はぁ……』

ジュ「大丈夫？ヴェリテ」

『精神的に疲れたわ……』

ミラ「あいつはいつもああだからな……」

『もう無駄にプライド高すぎるわよ！なーにが本物の巫子よ。巫子に本物も偽者もないってーのに！』

ジュ「あはは…ほんとに大変だね」

『しかもミラだけじゃなくシスコンでしょ！？心配性すぎるって！ほんっとどうにもなんないバカなんだから！』

ジュ「それでも嫌いじゃないんでしょ？」

『お、おふ…うん、まあそれは…』

ミラ「ふむ。確かにヴェリテは苦労しているが嫌いだというのは聞いたことがないな」

『……さ、ル・ロンドに行くよー』

ジュ「なんで棒読み！？」

『んもぅ、うるさいなぁ』

ミラ「照れ隠しだな」

ジュ「みたいだね」

『これってイジメ？』

文句いいつつも、なんだかんだいってイバルは兄だから。

嫌いじゃない苦手なだけ。

どっちもどっち

～ボルテア森道にて～

『そういやレイアって戦えるの？』

レイ「あったりまえ！じゃなきゃついてこないって！」

『まぁそれもそうね』

レイ「昔ジュードと鍛えたこともああったんだ」

『ああ、だからジュードってばあんなに強いのか……納得。ただの医学生がなんであそこまで強いのか不思議だったのよ』

レイ「でもいっつも私が勝ってたよ！」

『うんそれは何となくわかる』

レイ「あ、じゃあ逆に質問いい？ヴェリテは精霊術で戦うの？」

『魔物と戦うときはだいたい精霊術かしら？どっちかっていえば精霊術の方が得意だから』

ジュ「でも剣術も凄いんだよ。ヴェリテの戦い方って踊ってるみたいでカッコイイの」

レイ「踊りが得意なんだね！」

『得意ってか好きなだけ。それをアレンジして戦ってるのよ』

レイ「そうなんだぁ……」

ジュ「後ヴェリテは補助術が凄いんだよ」

レイ「なるほど……じゃあ戦闘の時は頼りにするね、ヴェリテ～！」

『……頼り、か。会ったばかりの子にも信頼されてるなんてね…』

ジュ「レイアはお節介だから」

『ジュードもお人好しだし、どっちもどっちね』

ジュ「……言い返せないよ」

レイアは誰に対してもハッキリした性格ですよね（＾ω＾）
そんなレイアが大好きです！

お節介少女

～フェルガナ鉱山にて～

『っ痛……』

レイ「大丈夫、ヴェリテ！？」

『ちょっと肩が……』

レイ「無茶するからだよ！」

『無防備に魔物に近付いたあなたがいうかしら、レイア？』

レイ「ひっ、ちょ、怖いってヴェリテ！！」

ジュ「はいはい、二人とも落ち着いて。ほら、ヴェリテ。治療するよ」

『お願いします…』

レイ「ヴェリテってたまにおっかないよねー…いっつもこんな感じなの？」

『うん、こんな感じ。ね、ジュード』

ジュ「そうだね。ちょっと怖いけど、でもヴェリテは凄く繊細なんだ」

レイ「繊細？」

ジュ「ヴェリテってね最初は人が大嫌いだったんだよ。人を信じることや頼ることを一切しなかったんだ。今だからこうやって触れられるけど、以前は僕たちでも触れることを拒んでいたんだよ」

レイ「え…そう、なの？」

『でも今は違う。ジュードや、旅してきたみんなに大切なこと、教えてもらったから。これからもっと変わっていければいいって思うの』

レイ「すごいね、ヴェリテ。私もヴェリテみたいに強くなりたい……」

『え…？』

レイ「よーし！私もお手伝いするね、ヴェリテ！」

『…もう、お節介なんだから。でも、ありがとう、レイア』

たまに黒いヴェリテ。
ていうかからかうのが好き（笑）
レイアともっと仲良くなればいい↑

寝不足

～ル・ロンドにて～

『ふぁ……』

ジュ「また欠伸してる…寝てないんでしょ、ヴェリテ」

『えっ！？そ、そんなことないわよ…』

ジュ「昨日も遅くまで起きてたでしょ。僕、知ってるよ」

『……』

ジュ「無理しないで僕らを頼ってって言ったよね？」

『十分頼ってるわ。でも頼りすぎってのもわたしのプライドが許せないの。自分の問題なら尚更、ね』

ジュ「ヴェリテ……」

『いざとなったら頼るからさ。今はわたしの好きにさせて？』

ジュ「……うん、分かった」

レイ「ヴェリテ！準備できた？」

『ええ、今行くわ』

ジュ「ヴェリテ！」

『何、ジュード』

ジュ「僕も頼りにしてるからね」

『ふふ、ありがとう』

ジュ「いってらっしゃい」

『うん、いってきます』

三週間ジュードの家のお世話になってたらいいよ。
少しでも回復術を使えるように絶対夜遅くまで勉強してるんだよ↑
治療医だから色々な資料があるものね。
因みにちゃんと許可は取ってある。
でも回復術使えないというね↑

からかうのが好き

～ル・ロンドにて～

『エリー、ティポ、会いたかったわ』

エリ「わ、わたしも、です！」

ティ「会いたかったよー！」

ロー「エリーゼさん、毎日のようにヴェリテさんは今頃どうしてるでしょうかと聞いてきたんですよ」

エリ「あのっあのっ」

『嬉しい、エリー。わたしもエリーのことずっと気にしてたのよ』

エリ「は、はい……ヴェリテは怪我とかしてませんか……？」

『ル・ロンドに来る前に肩を痛めたくらいかなぁ……レイアに治して貰ったからもう大丈夫だけどね』

ジュ「でもヴェリテは頑張りすぎだからね。気を付けないと直ぐに怪我するよ？」

『わたしをドジっ子みたいに……レイアじゃないんだから』

ミラ「ふむ。それは言えてるな」

レイ「あー！それじゃあまるで私がドジっ子みたいじゃない！」

『だって三週間前の出会いを思い出したら……ねえ？』

レイ「だっだからあれは……！」

ロー「ヴェリテさんも変わりましたね」

ジュ「うん。僕、いまのヴェリテの方が好きだな。生き生きしてて」

エリ「わたしも好き、です」

ティ「ヴェリテ君、キラキラしてるねー！」

レイ「でもなんかたまに怖いよ！！」

『だってからかうの好きですもの』

レイ「からか…っいじわるだよね、ヴェリテって…」

『褒め言葉として受け取っておくわ♪』

ヴェリテは黒いんです。
黒…かったらいいな。

体調不良

～ル・ロンドにて～

『……』

ジュ「ちょっとヴェリテ、大丈夫？なんかふらふらしてるけど…」

『うーん…夜中に高熱出しちゃったみたいで、まだちょっと熱あるみたい…』

ジュ「え！？む、無茶だよそんな体で行くなんて！」

『でもついて行くって決めたから。こんなのすぐに直して元気になるって！』

ジュ「大丈夫かなぁ、ほんと…」

ミラ「ふふ、ヴェリテが風邪か…珍しいな」

『体調崩すなんて滅多にないもの。体力はないけど』

ジュ「それもどうかと思うよ……」

『その変わり回復術以外の精霊術はお手の物だから！』

ジュ「そういう問題じゃなくてね……ああ、もう、話ずれてるよ！」

ミラ「ジュードは将来振り回されるタイプだな」

『将来ってか今もでしょ』

ジュ「ふたりとも……」

ヴェリテは運動音痴ってわけでもないんですけど、体力がないです。
でも風邪の免疫力や自然のものの耐性とかはかなりあります（笑）↑

術のコントロール

～ラコルム海停にて～

ロー「確かヴェリテさんの精霊術も詠唱を用いていなかったですよね。ヴェリテさんもミラさんみたいに、つべこべいわず言わず術を放て、と意志を込めながら使っているのですか？」

ミラ「いや、ヴェリテのは少し特別なんだ」

ジュ「特別？」

ミラ「ああ。精霊に愛された者、とでもいおうか。ヴェリテのマナはちょっと変わっていてな。直接マナに精霊の契約書というやつが刻まれていているんだ」

ロー「マナ自体が契約書であるから詠唱は不必要、ですか……それだけ優れた精霊術師なのに回復術が使えないなんて…」

ジュ「うーん…もしかしたらその特別なマナをヴェリテ自身がコントロールを出来ていないから使えないんじゃないかな…」

ロー「成る程。しかし私たちにはどうすることも出来ないでしょうね。ヴェリテさん自身が見出だせなければいけない問題でしょうし」

『それって根っからダメってわけじゃないってこと？』

ジュ「うわぁ！？ヴェリテ！！いつの間に！」

『さっきの間。で、どうなの？』

ロー「私たちでは憶測でしか言えませんが、その可能性はあります。少しやり方を変えつつやってみてはどうです？」

『やり方、ね…』

ミラ「やり方と言っても何億通りあるぞ」

ジュ「難しいけど地道にやっていくしかないのかな…」

『それでも可能性があるなら、わたしは諦めないわ』

ロー「それでこそヴェリテさんです」

ミラみたいに脅迫？で無詠唱じゃなくてーって考えた結果です。
わたしの中での回復術は、人それぞれにやり方があり、ヴェリテはそれが全く違う方法で、しかもマナに刻まれている契約書が間違っているから出来ないって感じ。
ヴェリテがマナをコントロールするということは、刻まれている契

約書を自分で書き換えることだと考えています。
元々の契約書があるから、詠唱を唱えても回復術が使えないんです。
自分で書いてて意味不／（＾ｐ＾）＼

気になること

～ラコルム街道にて～

『ねえ、アルヴィンて誰と手紙のやりとりしてるの？』

アル「ん？何？気になるの？」

『べ、つに、そういうわけじゃないけど。いつもこっそり手紙書いてるから…』

アル「やっぱ気になってんじゃん」

『…じゃあもういい』

アル「巫女姫様が前の約束守ってくれるなら教えてあげてもいいぜ」

『前の、約束？』

アル「そ。前俺が、なんで俺との共鳴を受け入れてくれるのかーってやつ」

『いっ今更！？もうそれはいいじゃない！！』

アル「でも俺気になって夜も眠れな――」

『うそつき。昨日わたしが見張り当番だったの忘れたの？めっちゃぐっすり寝てたくせに』

アル「ちぇ。教えてくれたっていいじゃんか」

『絶対教えない』

アル「じゃあ俺も教えない」

『っ…いいわよ、別に』

アル「なーんで怒ってんの、巫女姫様」

『怒ってないわよ、バホー！』

アル「バホーって…ティポかよ」

アルヴィンの手紙のことを気にしてればいいと思う。
でも自分の感情はまだわかってない。
ヴェリテはそういうのとは無縁な毎日だったから。
あれ、ヴェリテツンデ…違う違うそんなつもりはないんだけどもw

w
w
w
↑

イライラ……？

～シャン・ドゥにて～

レイ「アルヴィン君ってほんと協調性ないよね」

アル「だから悪かったって」

『アルヴィンがいないからレイア怪我したんだから』

レイ「それはヴェリテだってお……むぐっ」

アル「は？ヴェリテが、何？」

『わたしが回復術使えたらーってこと』

レイ「ちょっと何するの！」

『あんま心配かけたくないのよ。だから黙っていて？』

レイ「……分かった」

『ありがとう』

アル「おーい」

レイ「あーもぅ、アルヴィン君がいてくれたらわたし怪我しなくて済んだのにぃ」

アル「おまえ、根に持つタイプか？」

レイ「慰謝料請求してやるー！」

アル「なんでだよ。別に関係ねーだろーが！」

レイ「いたたたっ！怪我したところが！」

アル「レイアは演技下手だな」

レイ「あっひっどーい！」

『……なんだこれ』

ミラ「どうした、ヴェリテ」

『あ、ミラ。うん……なんかね、あのふたりみてたらイライラしてきちゃって。ぶっ飛ばしてきていいかしら、アルヴィンを』

ミラ「待て待て。イライラって……あのふたり、ただ話しているだけではないか」

『いや、そうなんだけど……こう、……ほら！』

ミラ「分かるか」

『ですよねー……うーん…』

ヴェリテの嫉妬編。
ただ単にヴェリテはそう言う経験は勿論、関わることも無かったため に気付かないだけ決して鈍感じゃない鈍感じゃないんだ←
気付くのはもうちょっと先。

嫌いじゃない

～シャン・ドゥにて～

アル「ヴェリテ、あの後倒れたのか……？」

『え、あ……うん……』

アル「悪いな」

『何でアルヴィンが謝るのよ…』

アル「いや…別に…」

『……ありがとう』

アル「え？」

『助けてくれたでしょ？お礼言ってなかったなって思って』

アル「ああ……」

『……恐かった、よ』

アル「！　そうか…」

『もう勝手にどこかに行ったりしないで、アルヴィン』

アル「気を付けるよ」

『良かった…』

アル「……俺のこと、嫌いじゃねーのかよ」

『……分からない。でも嫌いだったら一番に切り捨ててるはず…だから多分嫌いじゃない、よ』

アル「…うん」

『アルヴィン、は…？』

アル「…まぁ……嫌いじゃないのは確かだ」

『……嬉しい』

アル「！　ったく……ほら、行くぞ」

『あ、待って！』

アル「（そんな表情、すんなよ）」

ヴェリテは時々本当に嬉しそうに笑うから、アルヴィンはどうしていいのか分からなくなるんです多分↑

頼ることを

～王の狩り場にて～

『っ痛……』

レイ「まだ無茶しないほうがいいよ、ヴェリテ」

『あはは、ありがとう。でも逆にみんなに気を使わせちゃうから……』

レイ「そんなの気にしなくて大丈夫だよっ！みんなヴェリテのことが好きだから心配してるんだし」

『レイア……』

レイ「でもヴェリテが頑張るならあたしがフォローするから」

『うん、頼りにしてるわ』

レイ「……とかいって頼ることをしないくせにぃ……」

ジュ「まあそれも少しずつでいいんじゃない？」

レイ「……うん、そうだね。ヴェリテ自身もきっと頑張ってるよね……でも陰ながらサポートはしちゃうんだから！」

ジュ「それでいいと思うよ。レイアらしいとも思うし」

レイ「ありがと、ジュード！」

気を遣うことよるみんなを頼ることを覚えてヴェリテ！↑

初めての雪

～モン高原にて～

『雪……！ミラ、雪よ！』

ミラ「見事な景色だな」

『わぁ……』

ジュ「ヴェリテ、はしゃぎすぎて転ばないでよ？」

『ジュードは心配しすぎよ！お母さんか』

ジュ「おか……っ違うよ！」

『あはは！』

ミラ「雪を見るのは久しいな…」

『わたしは初めてよ、ミラ！』

ミラ「む。そうだったのか」

『ニ・アケリアじゃ殆ど降らないって聞いてたし実質初めてなものよ』

アル「あ、おい！」

ロー「ヴェリテさん！」

『ぎゃっ！？』

アル「言わんこっちゃない……」

『痛たたたた……』

ロー「大丈夫ですか？」

ジュ「顔面からとかベタすぎるよヴェリテ」

ミラ「お？見てみろジュード。ヴェリテの顔形が出来てるぞ」

『わー！見ないで恥ずかしいから！』

ミラ「ふむ、面白そうだな。えい！」

ジュ「ちょ、ミラ！？」

ミラ「おお……これは楽しいな！」

ジュ「ミラ……」

『あはははは！自分からやるなんてミラらしいよ！』

ミラ「好奇心、というやつだ」

『お、木の実発見！』

ロー「赤い木の実…サンの実ですね。食べられはしませんが、保存が利くのでアクセサリーなどに良く使われています」

『へー…あ、じゃあちょっと持っていこうかな。あとこの葉っぱも』

アル「どーすんだ、それ」

『内緒よ』

これが雪うさぎに繋がります↑

それにしてもヴェリテってこんなキャラだっけ↑↑おま

ガールズトーク

～カン・バルクにて～

レイ「で、どうなの？」

『はっ？』

レイ「だーかーらー！相手をどんな風に感じるのかって話！」

『……言うの？』

レイ「勿論！」

『う……えっとね……ドキドキして目が離せなくて、彼が隣に居ると凄く安心するの。時折見せる悲しい表情を見ると胸が締め付けられたように感じて……女の人と仲良くしてるのを見るとなんかイライラして彼をぶっ飛ばしたかった』

レイ「ベタ惚れじゃんヴェリテ」

『っ！そ、そうなの？』

レイ「そーなの！やーもーヴェリテも一人前の女かー…」

エリ「何の話をしてるんですか？」
レイ「ヴェリテが恋したって話！」
『レイア！』
ティ「ヴェリテが恋ー！！ぼくショック～！」
『ぎゃあああ！食うな！離れろ！ティポー！』
エリ「恋、ですか……」
レイ「そうなんだよー！もうヴェリテを見てるだけで癒される！恋してる乙女は変わるからね！」
エリ「誰にですか？」
『えっ！？いや、それは……――』
レイ「そりゃあ、あｒ」
『行け、ティポ！』
ティ「おりゃー！」
レイ「きゃぁあああ！噛みつかないでよー！」
エリ「あ……？」
『聞かなかったことにしてね』

エリ「？　はい……いつかは教えてくださいね、ヴェリテ」

『エリーは分かってくれて嬉しいわ。もうマジ天使』

こんなガールズトーク（笑）
あれティポはおとこの、こ？↑

高所恐怖症

～カン・バルクにて～

『空中滑車ねぇ…』

アル「あそこからの眺めは最高だろうな。あとで一緒に乗るか、巫女姫様♪」

『ねえ喧嘩売ってる？売ってるよね？』

アル「んなわけないだろ」

『どんなに景色が良くってもわたしは高いところが駄目なのー！』

アル「わかりましたわかりました」

ジュ「でもなんで高いところが駄目なのさ」

アル「そうそう。おたくニ・アケリアから出たことなかったんだろ？それなのに高いところが苦手って…」

『…バカと一緒に修行だーって、小さいころニ・アケリア霊山に登ったの……その時は雨が降ってて地面も滑りやすくなってたのよ。それで頂上で足を滑らせて、ね…』

ミラ「あの時は私がいなければふたりとも死んでいたのだぞ」

『も、もう反省してるって！あれから怖くて霊山も登ってないし…』

ミラ「あれは結構なトラウマになったろうな」

アル「へぇ…克服しようとは思わないの？」

『ずっとニ・アケリアにいると思ってたから考えたことはなかった…でも直すべき、なのかな……』

アル「これからワイバーンに乗るんだけど」

『！！！…ど、どうしよう…』

ミラ「ふむ、低飛空のままではイル・ファンへはいけないしな…」

『でも直す時間なんて…』

アル「まぁ気合で乗り切ればいいんじゃない？」

『無理無理無理！ほんとに無理なんだから！！！』

ジュ「困ったね…」

アル「そんじゃまた俺が助けてやろうか？」

『！　で、でも…』

アル「あれ？巫女姫様は俺じゃ不服？」

『……知らないっ！』

ジュ「ちょ、ヴェリテ！？」

ミラ「アルヴィン、ヴェリテはなぜ逃げたのだ」

アル「さーて、ね……」

ヴェリテの高所恐怖症の原因のお話（笑）

笑顔が一番

～モン高原にて～

『ジュード君。ちょっと相手してくれないかな、憂さ晴らしに』

ジュ「ちょ、怖いってヴェリテ！」

ミラ「これはかなりきてるな……」

エリ「ヴェリテ…」

ティ「怖いよヴェリテー…」

『いいから構えてよ』

ロー「ジュードさん、素直に相手をして差し上げた方が身のためですよ」

『相手しなかったら痛い目みるわよ。相手しても痛い目みさせるけど』

ジュ「僕に選択肢ないじゃんか！」

レイ「わたしがちゃんと治療してあげるから頑張っ！」

ジュ「そんな目で見ないでよ！っヴェリテ、取り敢えず落ち着こうよ。ね？」

『……ジュード…』

ジュ「…何？」

『わたしってやっぱり子供なのかな……』

ジュ「どうして？」

『何かに当たらなきゃこの胸のモヤモヤを消せないの、消えてくれないの』

ジュ「アルヴィンのせい…？」

『っわかんない……わたし、こうなることを少なからず予想してた。でも何でか割りきれないの……苦しくて、痛いの……』

ジュ「ヴェリテ、それって…」

『やっぱりなんでもない。変なことばっかり言ってごめんね』

ミラ「ジュード。私は長年ヴェリテと共にいるがあんな表情は初めて見た…あれはなんだ」

ジュ「多分、ヴェリテはアルヴィンが好きなんじゃないかな」

ミラ「好き……あれはアルヴィンに惚れているのか？」

エリ「だからあんなにも悲しそうに笑うんですね……」

ティ「アルヴィンはバホーだよ！」

ミラ「私にはその感覚は分からない。だが、ヴェリテのあんな表情はもう見たくない……」

ロー「ええ。ヴェリテさんは素直に笑ってる顔が一番素敵ですからね」

レイ「次にアルヴィン君に会ったら罵ってやろう！」

ジュ「レイア……」

レイ「なによー！ジュードだって笑ってるヴェリテが好きでしょ！？」

ジュ「それは……そうだけど……」

ミラ「そうだな。そしてヴェリテは一発あいつを殴るべきだ」

ジュ「怖いよ、ミラ……」

みんなはヴェリテが大好きです。
だから笑ってほしい。
そんな顔はしないで、と。

絶対諦めない

～シャール家にて～

『はぁ…』

ジュ「そんな深い溜息ついてどうしたの？」

『いや…何度か挑戦してるんだけど、マナのコントロールが上手く行かなくて……』

ジュ「コントロール？」

『ほら、前に言ってたじゃない？コントロール出来れば回復術を使えるようになるかもって』

ジュ「ああ、うん。それでそれが上手く行かないの？」

『あれから毎日試してるわ。そうね……三千万くらいの通りは試したなんだけど全然…』

ジュ「もうそんなに試したの！？それで見つからない方が不思議だよ…」

『あ、ここだ！ってのもないのよね…外れっぱなし』

ジュ「だったらそのやり方ってのはひとつしかないのかも…」

『えっと、つまり…』

ジュ「なんて言ったらいいのかな……回復術にもいろいろなやり方があるけど、それは人それぞれで、ヴェリテの場合はそのひとつの通りでしかできないんじゃないかってこと」

『そのひとつの通りに当たらないと、ピンとも来ないってわけね』

ジュ「だから近しい感覚もないんじゃないかな…」

『うーん…余計に悩む…このままで回復術使えるのかしら…』

ジュ「でもヴェリテは諦めたりしないよね」

『ジュード、わかってるじゃん！…今日ね、アルヴィンに守ってもらったじゃない？守ってくれるのは嬉しいんだけど、それで怪我されちゃこっちが困るっていうか、落ち込むっていうか、申し訳ないっていうか…』

ジュ「うん。それは僕もわかるよ」

『だからもしそうなってもすぐに治療できるようになりたい…仲間が傷つくのを黙って見てられない。わたしだけ何もできずにだだ見てるだけなんて嫌なの』

ジュ「ヴェリテならきっと探せるよ。僕、応援してるからさ」

『ええ、見ていてジュード。絶対に回復術を使えるようにして見せるから』

ヴェリテは頑張り屋さんで諦めが悪いです＾ｐ＾

ジュードとのそんな会話。

体力づくりの成果

～シャール家にて～

ジュ「そういえばヴェリテ、最近疲れなくなったよね」

ミラ「うむ、確かに。今までは激しい戦闘後や、わたしたちに歩幅を合わせるだけで倒れてたのに」

レイ「ああ、確かにねー」

『う……こ、これでも体力作りは毎日してたのよ！今までは成果がでなかっただけで…ごにょごにょ』

エリ「四象刃と戦った後も、さっきの魔物と戦った後もヴェリテは元気です」

ティ「ヴェリテはそのうちムッキムキになるねー」

『やだそれ！！！』

ロー「ヴェリテさんはコツさえ掴めばなんでもできそうですね」

『うーん、確かにちょっと体力づくりの方法とか変えたらなんとなく自分に合ってたような…』

ジュ「今までは自分に合ってない体力づくりしてたの！？」

『いや、ほら、早くみんなに追いつきたいなーって思って無理を…』

ジュ「はぁ…そういうところは変わらないね、ヴェリテ」

ミラ「まぁそこも人間らしさだ」

ジュ「ミラがいうと説得力あるようなないような…」

『とにかく、いまは大丈夫なんだからいいでしょ！』

ジュ「わかったよ、ヴェリテ…」

『流石ジュード！』

ジュ「なんだかなぁ……」

ちょっと成長したヴェリテです（＾ｏ＾）ノ
高精度の精霊術を使っても平気になりました。
マナが増えた証拠ですねたぶん↑

変われたきっかけ

～オルダ宮にて～

『…ナハティガルと戦う、か…』

アル「怖いのか？」

『…怖くないって言ったらウソ。でもあの人は許せない。人も精霊も自分の手のひらの上で弄んでいる。マクスウェルの巫子である前に、ひとりの人として許せないんだ…』

アル「お前、いい目になったよな」

『え？』

アル「少し前までは自分以外は誰も信じなかった。自分から人を遠ざけて、嫌って、それでお前は一人だった」

『…うん。でも人と関わることのきっかけをくれたのはアルヴィンよ』

アル「そう、だったか？」

『わたし、ミラの使命だけのために一緒に行くって決めた。だから

人となんて関わるつもりはなかったの。あのときアルヴィンがわたしの手をとってくれたからわたしはもう一度人を信じてみたくなった』

アル「そうか……」

『ここまで変われたのはアルヴィンがいたからなのかもしれない。アルヴィンのその強引さがあったから、いまのわたしが在るんだと思う。アルヴィンのおかげよ』

アル「…ヴェリテ」

『…どうしようもないくらい、感謝してる。ありがとう、アルヴィン』

アル「…なんでお前はいつもそうやって笑うんだ……いっそのこと本気で嫌ってくれればいいのに……」

アルヴィンは酷く綺麗に笑うヴェリテが苦手。
ヴェリテ自身じゃなくてその笑顔が。

感覚とコツ

～イル・ファンにて～

アル「そういやさっきのヴェリテの精霊術、すごかったよなぁ」

ロー「はい。あれほどまでの精霊術を見たのは初めてです。いつの間に習得してらしたんですか？」

『え、いや……何かみんなを助けなきゃって思って無我夢中だったから…覚えてないや』

ジュ「え…じゃあその術は使えないってこと？」

『うん。無理ね』

アル「キッパリいうなぁおい…」

ロー「しかしあの時のヴェリテさんのマナは異常でしたよ。いつもとは違う感じがしました」

『ああ、それはわたしも感じた。確かにいつもとは違ったて言うか逆だったて言うか……』

ジュ「やっぱり感覚とコツを掴まないと無理ってことだね」

『あと一回くらい使えればなんとかなると思うんだけど…これがまた難しいのよねぇ』

ジュ「あれだけの術だし……」

『けど扱えるようになったらきっと戦闘も楽よね……わたし諦めず頑張る』

アル「ヴェリテらしいねぇ」

『まあね！』

取り敢えず秘奥義使えないって話↑
でも諦めないのがヴェリテです。

可愛い悲鳴？

～イル・ファンにて～

アル「ヴェリテ」

『うわっ！アルヴィン！？』

アル「だからなんでそんな驚き方なのよ巫子姫様」

『な、なんでって、わたしいつもこうじゃない…』

アル「そうか？ならワイバーン乗った時のこと、思い出してみろよ」

『え……あ、っ！！違っ…あっあれは違う！』

アル「くくく、めっちゃ可愛かったんだけどなぁ、ヴェリテ」

『っな、に……よ…』

アル「え（…予想外の反応なんですけどなにこれ）」

『別に女の子らしくなくたっていいわよ、バホー！』

アル「だからバホーって……あーあ。可愛かったのはほんとなんだけどなぁ」

もう取り敢えず怖さの限界を越えたら女の子になります叫び声が↑↑

あなたになら

～ファイザバード沼野にて～

『うわっ！』

アル「！　大丈夫かヴェリテ！」

『う、うん。ちょっと足が縺れただけだから…』

アル「お前、無理してんじゃねえの？」

『それを言うならジュードの方がでしょ。わたしは大丈夫。足を引っ張りたくないから』

アル「でも倒れたら元も子もないんだぞ」

『じゃあアルヴィンに背中を任せるわ』

アル「え…」

『わたしが倒れそうなときは助けて。わたしが少しでも逃げようとしたら迷わず撃って』

アル「な…」

『あなたになら預けられるから』

アル「……ヴェリテ」

『行くわよ、アルヴィン！！』

アル「っ…しゃあない。仰せのままに、巫子姫様！！」

お互いがお互いの背中を守っていたらいい（´∀｀）

ヴェリテの髪

～ククル洞窟にて～

アル「おたく、そんなに髪長かったっけ？」

『ああ、ニ・アケリアを出たあと全く切ってなかったから…どうせならバッサリきっちゃおうかしら。邪魔なのよね』

アル「待て待て待て切るな！」

『な、なんでよ…』

アル「あ、いや…なんつーか…似合ってる」

『！！！　ア、アルヴィンがそういうなら……このままで……』

アル「（だからその反応は何期待していいの！？）」

『でも髪留めなくなっちゃったし…どうしよう…』

アル「お気に入りだったのか？」

『うん。あれもイバルにもらったものだから』

アル「巫子殿にねぇ……」

『え？何？なんで怒って…』

アル「別に？怒ってねーって」

『あの、でも…』

アル「いーからいーから。ほら、行くぞ」

『っだからほってかないで！！！』

アル「（兄妹だろーが！！何モヤモヤしてんだ俺…）」

こっちもこっちで重症（笑）

過保護？

～ククル洞窟にて～

ジュ「アルヴィンとヴェリテ、ここまでずっとふたりだったの？」

アル「ん？まぁな…」

ジュ「ヴェリテに変なことしてないでしょうね？」

アル「変なことって何。俺そんな風に見える！？」

エリ「見えます…」

アル「エリーゼ姫まで、酷いなぁ…」

ティ「男はみんな獣なんだぞー！」

ジュ「ヴェリテを泣かしたこともあるしね」

エリ「そうです…泣かせました…！」

アル「お前らなぁ…」

ジュ「結局のところどうなのさ」

アル「別になんもしてねーって！！！なぁ、ヴェリテ！」

『起きたら抱きしめられてた』

アル「！？」

ジュ「何したの、アルヴィン」

ティ「ハクジョーしろー！！」

アル「待てって！本当に何も…！！！」

『ふふふ』

アル「ヴェリテー！！！！」

『面白かったから、つい』

ジュ「あれ、冗談？」

『いいえ。抱きしめられてたのは本当』

エリ「ヴェリテを抱きしめていいのはわたしとミラとレイアとジュードだけです…！」

ジュ「ぼ、僕も！？」

『エリー…もう大好き！愛してる！！！』

ティ「ぼくもー抱きしめてー！！」

『おいで！』

アル「なにあれ」

ジュ「羨ましいんでしょ」

アル「別に…俺抱きしめたし……あっ！？」

ジュ「ふぅーん」

アル「え、ちょ、なんで拳構えてんの、優等生！？」

『おバカ』

アルヴィンごめん＼（＾o＾）／↑
そしてジュードがおかんwwww

愛された者

～ククル洞窟にて～

ミュ「あなた、不思議ね」

『わたし…？』

ミュ「ええ。とても不思議な力を感じます。私と近いような…」

『多分マナが特殊なだけだと思うけど』

ミュ「特殊…ですか？」

『わたしのマナには直接、精霊との契約の紋が刻まれているの』

ミュ「そのようなことがあるのですか？」

『滅多にないんじゃなくて？昔の古文書とか読んでもわたしみたいな事例はなかったらしいから』

ミュ「精霊に愛された者、ですか…」

『ミラもそんなこと言ってたっけ……愛された者、ねぇ…』

この会話がキーに…なればいいな↑
ならないかも↑↑

直接使役？

～ザイラの森の教会にて～

ジュ「あのさ、ヴェリテ」

『ん？何かなジュード君』

ジュ「直接使役って、何？」

『そ、それをわたしに聞くの！？』

ジュ「ヴェリテまで…教えてくれないの？」

『そんなこと…っわ、わたしが言えるわけ…ッッ！！』

ジュ「え、え…？」

『もしかしてミュゼを直接使役してるの…？』

ジュ「うん、そうだけど…」

『やだ…そんなことって……ウソ…！信じ、られないっ』

ジュ「ちょ、ヴェリテ…？」

『ジュード…わたし…わたし……もう……っ！！！』

ジュ「え、あ、ちょっと待ってよ！！ヴェリテ！！！…だから、一体、なんなのさー！！！」

『…ちょっとからかいすぎたかしら』

アル「おたく、楽しいだろ」

『ええ、もちろん！』

アル「めっちゃ笑顔だなあおい」

実はミラとの会話を聞いてたりして（笑）
それでからかうヴェリテです↑
誰か直接使役の意味教えて／（＾ｏ＾）／↑
ヴェリテは知っている設定です。

成敗

～ザイラの森の教会にて～

ミラ「アルヴィン。昨日、ヴェリテが真っ赤になって帰ってきたのだが、何か知らないか」

アル「！？　べ、別に何も…」

ジュ「アルヴィン！！またヴェリテに何かしたの！？」

ミラ「また、とは以前にも何かしたのか！？」

アル「なんで俺って決めつけるんだよ！！」

ジュ「だってアルヴィン、あれからまた出て行ってたじゃん」

アル「！！？　ゆ、優等生…起きてたのかよ…」

ジュ「眠れなかったから。で、どうなの」

アル「だから、なんで俺なんだよ！！！」

ミラ「吐け、アルヴィン。さもなくば刺す」

アル「ちょ、待てよ！！っヴェリテからもなんか言えって！！！」

『……あは』

アル「おま、その笑顔何…」

ジュ「アルヴィン」

アル「まっ待て待て待て！」

ジュ「？殺劇舞荒拳？！！！！」

アル「あべしっ！？」

『っ…ばかアルヴィン…』

成敗されました＼（＾ｏ＾）／

アルヴィンごめんｗｗｗ

いつから？

～カン・バルクにて～

アル「いつから俺のこと好きだったの？」

『ちょ、ベタベタしないでよ…っ』

アル「いいじゃん。…で？」

『う……じ、自覚したのは…リーベリー岩孔からシャン・ドゥに帰ってきた時……』

アル「じゃあそれ以前から好きだったってこと？」

『っ、一度カラハ・シャールで別れたでしょ？あの後からずっと何か足りないって思ってて…それでル・ロンドでアルヴィンに会った時、その足りないものが埋まった気がして……』

アル「……ヴェリテ」

『た、ぶん…アルヴィンがわたしの手を取ってくれた時から……だと思う……』

アル「…っ好き…ヴェリテ、好きだ…」

『ひゃ、っちょっと、こんなとこでやめてよ…っ！そ、それよりアルヴィンは……？』

アル「教えてあげない」

『何それっ！』

アル「俺を大嫌いって言った罰」

『そ、それは…！！』

アル「俺めっちゃ傷ついたんだけどなー？」

『っ…ごめん…』

アル「その傷が埋まるまで俺のこと大好きって言い続けたら考えてやってもいいぜ」

『！！？　な、そ、それ…っ』

アル「出来なくもないだろ？」

『い、意地悪…！……じゃあわたしがアルヴィンはのことが好きってことには気付いてたの？』

アル「なんとなく？」

『なんとなくって……』

アル「ヴェリテは気付かなかった？」

『……だって子供扱いするし』

アル「好きな子ほどいじめたくなるんだよな」

『っ！』

めっちゃラブラブ（笑）

爆ぜろ＼（＾ｏ＾）／

恋人同士

～ジルニトラにて～

ジュ「いつのまにそんな関係になったの？」

『そ、そんな関係って…』

ミラ「恋人同士、というやつか」

アル「そーそー、俺たち恋人なの♪」

『こっ恋人って…！！っエリー、アルヴィンが苛める…！！！』

エリ「アルヴィンは悉く風紀を乱します…！」

ティ「ヴェリテの気持ちも考えろー！！」

アル「なんで俺責められてんの…！！ほんとのこと言っただけだろー！っヴェリテー…」

『うっ！？そ、そんな目で見ないでよ…！』

ロー「ほっほっほ、青春ですねェ」

レイ「いーなぁヴェリテー！！」

『ローエンとレイアまで！！』

ジュ「で、結局いつから？」

アル「なんで原点に戻んの優等生…」

ミラ「さながらヴェリテの保護者だな」

ジュ「違うってば！！」

『ジュード君って心配性すぎてこっちが心配するわね…』

ジュ「だから僕は…！！」

アル「はいはい。別に俺たちがいつ付き合おうと関係ねえだろ？あ、それとも優等生も羨ましいからヴェリテを苛めてんの？」

ジュ「アルヴィン！！」

アル「冗談だよ」

『じゃあレイアには教えちゃお。相談に乗ってもらったし！』

レイ「お、流石ヴェリテ！わかってるじゃん！」

エリ「わたしにも教えて、です！」

ティ「きーにーなーるー！！」

ミラ「ふむ。ならば私にも…」

『結局みんなに教えることになるんだから……恥ずかしいのよ、これでも…』

アル「そこが可愛いんじゃねーの」

『行け、ティポ』

ティ「ちょっと黙っとけー！」

アル「！！？　なんでヴェリテのいうこと聞いてんだよ！！！」

エリ「ヴェリテは特別なんです！」

ティ「特別ー！」

アル「離れろよー！！！」

『恥ずかしいこと言わないで、バカ』

何故かヴェリテのいうことを聞くティポ（笑）

アルヴィンの扱いがだんだん酷くなってきてるｗｗｗ

家族

～ジルニトラにて～

『っアルヴィン！さっきのは何よっ』

アル「何って虫除け」

『は！？虫除け！？』

ジュ「それにしたってあれはやり過ぎだよ、アルヴィン」

アル「うわ！？優等生、いつの間に…」

ジュ「分かってるよね？今度ヴェリテを泣かしたら許さないよ」

『（既に泣かされているんですが…色々な意味で）』

アル「（お願いだから黙っとけよヴェリテ！！！！）」

『（なんかめっちゃ必死な顔してるなぁ…仕方ない。黙っておくか）』

ジュ「分かってるの？」

アル「わ、分かってるよージュードママ～」

ジュ「誰がママだよ！！」

『ジュード君はわたしより年下なのにめっちゃお母さんみたい』

ジュ「ヴェリテまで！」

『ミラがパパで、レイアが妹で、ローエンがお爺ちゃんで――』

アル「エリーゼ姫が俺たちの娘な」

『娘……エリーが…うん、いいね、その家族設定』

ジュ「家族設定！？」

きっとこんな関係←

そのための

〜ジルニトラにて〜

ミラ「……」

『どうしたの、ミラ』

ミラ「ん、あ、いや……」

『…無理にとは聞かないけど、相談なら乗るわよ』

ミラ「ああ、ありがとうヴェリテ」

『最近ずっとミラこんな調子よね…』

ミラ「む…心配を掛けていたか」

『ちょっとね』

ミラ「……私の思いと行動が矛盾しているという感覚に陥る」

『…確かに、今のミラはそうかもしれないわね…』

ミラ「お前はわかるか」

『そうね……ミラは何かに恐れているんじゃないかしら』

ミラ「恐れて…？」

『わたしからは言えないわ。それはミラ自身が見つけ出さなくちゃ』

ミラ「…ヴェリテは…」

『わたしも、ミラと同じ感覚があるから……なんとなく、で言ってるんだけどね。でも、ミラ。絶対に約束して。ひとりで無茶はしないで。そのための巫子。そのための仲間なんだから』

ミラ「…ありがとう、ヴェリテ」

『ええ、ミラ』

今でも優先させるべきは巫子の使命です。

ミラの正体？

～ニ・アケリア霊山にて～

ティ「ヴェリテー！！」

『食べるなってー！』

ジュ「ヴェリテ、良かった…」

エリ「心配しました！」

ロー「全くですよ。ジジイの寿命が縮みました」

『あはは。みんな、ありがとう』

レイ「もうアルヴィンなんか大変だったんだよ！ヴェリテが目覚めないーって！！」

アル「ばっレイア！」

レイ「だってほんとのことでしょ！？」

アル「う……まぁ…はい」

『無謀なことして、ごめんなさい。でもわたし、ミラを放って置けなかった……』

ジュ「ヴェリテはミラがマクスウェルじゃないって気付いてたの…？」

『……うん。でも多分人間とも違う気がするの』

エリ「人間じゃないんですか？」

『うーん……そこまではよく分からないけど……確か元素を用いて人間の身体を創造したってミラは言ってたわよね』

ジュ「うん、そうだった。でもそれも本当かどうか……」

『まあもしそうだったとして、その時点で常人とは異なる。だからちょっと違う感じがする、んだと思う』

ティ「チンプンカンプン」

『あはは……普通そうなるわよね。でもミラはミラ。何者であっても変わらない。そうでしょ？』

ロー「ヴェリテさんもヴェリテさんですね。やはりあなたはそうでなくては」

レイ「そうだね！それにまたヴェリテの笑顔をみれて嬉しいよ！ね、アルヴィン」

アル「あ、ああ……そう、だな……」

ティ「アルヴィン照れてるー！」

エリ「ヴェリテも真っ赤ですよ」

レイ「なんかふたりは見てて飽きないなぁ」

ジュ「レイアってば……」

わたしの中ではミラは人間ともちょっと違うってイメージなんですけど……実際どうなんでしょうか……

人間、なんですかね？

安心する方法

～ニ・アケリア霊山にて～

ジュ「そういえばヴェリテ、ここ、トラウマがあった場所でしょ？大丈夫なの？」

『うん…実はまだちょっと震えてる…さっきのこともあったから…』

ティ「そういうときはアルヴィンの手を握ればいいよーヴェリテー」

『！！！！』

エリ「ヴェリテがアルヴィンと手を繋いでいるときはすごく落ち着いた表情をしてます」

『よ、よく見てるのね……』

ティ「だってヴェリテのこと大好きだしぃ」

エリ「です」

レイ「ってことで、はい」

アル「いや、そういわれると繋ぎにくいっつーかなんつーか…」

『気が引けるっていうか恥ずかしいっていうか…』

ジュ「からかうのはよしなよ、みんな…」

エリ「からかってません！事実です…！」

『あはは…』

みんなから祝福されてればいい↑

似合うよ

～ニ・アケリア霊山にて～

ジュ「はい、アルヴィン」

アル「ん？あ…」

ジュ「髪留め。つけてあげないと」

アル「…そう、だな」

アル「ヴェリテ」

『何、アルヴィン』

アル「髪、邪魔だろ」

『！　うん。頼めるかしら』

アル「任せろ」

『ちょっとくすぐったい』

アル「もうちょっとだ、我慢しろ。ほい、出来上がり」

『なんかわたしより上手いとかショック』

アル「なんだよそれ」

『なんでもない。ありがと、アルヴィン』

アル「…やっぱ、お前には笑顔が似合うよ、ヴェリテ」

『っ…もう』

爆ぜろ（＾ｏ＾）ノ↑

いや、自分で書いててあれなんですけど、爆ぜろｗｗｗｗ↑↑

していいの？

～世精ノ途にて～

アル「っとに、ヴェリテは心配ばかりさせる…」

『あら、ジュードの心配性癖が映ってきたのかしら』

アル「ちげーよ。お前が大切だから心配なの」

『……わたしが起きなかったときも心配だった？』

アル「っ当たり前だろ！…どれだけ、心配したか……」

『アルヴィン、いつもわたしに会いに来てくれてたもんね』

アル「！！　なんでそれを知って…！」

『セルシウスに教えてもらったの』

アル「ああ、セルシウスか……」

『……キス、したんだって？』

アル「！　な、なんのことやら…」

『責めて意識があるときにして欲しかったなー…なーんて、冗d――』

アル「していいの？」

『へ？』

アル「キス、していいの？」

『いや、ちょっと、待って！なんでこんなとこで！？っじゃなくて、ダメー！！！』

ティ「アルヴィンのバホー！！！！！」

アル「！？」

『！　ティポナイス！！』

エリ「アルヴィンなんて嫌いです！行こ、ヴェリテ！！」

『あはは…』

アルヴィンとエリーゼは早く仲直りすればいい（＾ｏ＾）ノ

離れない

～トリグラフにて～

アル「ヴェリテ」

『な、何…』

アル「好き、ヴェリテ」

『っ、わ、わかったから…っ』

アル「ずっとこうしていたい」

『だ、駄目だって…！みんな待ってるんだから』

アル「待ってなかったらいいの？」

『そ、れは…』

アル「可愛い、ヴェリテ」

『もう、どうしたのよ』

アル「（バランに嫉妬したなんて、言えるかよ…）」

『ねえ、アルヴィン…』

アル「離したくない」

『ちょっと…』

アル「もう、どこにも行くな」

『アル、ヴィン……？』

アル「離れんな」

『……うん。離れない……』

ラブラブさせてみた（＾ｏ＾）丿

ヴェリテの力

〜トリグラフにて〜

ジュ「そう言えばヴェリテ、あの術使えるようになったんだね」

『うん。もうコントロールできたからこれからも使えると思うわ』

ジュ「どうやったの？」

『感覚で言うと、マナに刻まれている契約書を書き換える、って感じ』

ジュ「そんなことができるの？」

『あくまで感覚の話。もともとわたしも感覚で精霊術を使っていたから』

ジュ「じゃああの時のも、感覚？」

『そうね…だからもう一回ってのは難しいかも…』

ジュ「そっか。なら他を探すしかないか……」

『…気味悪がらないのね。あんな力を使ったってのに…』

戸惑ってるヴェリテ。
まだ受け入れられません。

聞きたい

～トリグラフにて～

『アルヴィンの恥ずかしい話…』

アル「おい、変な気起こすなよヴェリテ」

『やだ。バランさんに聞こうだなんてこれっぽちも思ってないから♪』

アル「そんな笑顔で言われても逆効果なんですけど」

『だって気になるじゃない！』

アル「あのなぁ…一番ヴェリテに知られたら立ち直れねえよ」

『あはは、余計聞きたくなった』

アル「おま、やめろよ！」

『今のアルヴィンしか知らないし、ひねくれる前のお話とか聞きたいんですもの』

アル「バランに聞くのだけはやめてくれ…！」

『じゃあアルヴィンが教えてくれるの？』

アル「……手取り足取り教えてやるよ」

『え、ちょっと、ご、ごめんって！！！』

アルヴィンの笑みに恐怖を覚えました←

見惚れちゃう？

～ヘリオボーグにて～

アル「お前もうバランに近づくな」

『え、なんでよ』

アル「っいいから！」

『だって悪い人じゃないんでしょ？』

アル「それでもダメ」

『……嫉妬してるの？』

アル「……」

『図星？』

アル「……別に？してねえし？」

『してるんだ』

アル「わ、わるいかよ…」

『もしかして初めて会ったときも嫉妬してた？』

アル「……」

『……バランさんってアルヴィンに似てるわよね。目元とか口元とか。なんか見惚れちゃう。カッコイイ』

アル「…後で覚えとけよ、ヴェリテ」

『ウソですごめんなさい冗談です』

からかうつもりが墓穴を掘りましたヴェリテさん（笑）

無茶しないで

～ヘリオボーグにて～

エリ「ヴェリテのバカバカ！なんで無茶するんですか！」

『ご、ごめんってエリー…』

ティ「ゆーるーさーなーいー！心配したんだぞー！！」

『もう、ティポまで…』

エリ「確かにヴェリテにしか、できなかったことかもしれません…
でも、それでもわたしたちを頼ってくれたって…」

『うん。わかってる。だから力を貸してくれた時はすごく助かった』

ティ「次、無茶したら絶交だー！！！」

エリ「そ、そこまでは…！」

『それは勘弁ね。エリーとは友達でいたいし』

エリ「な、なら約束、です！！」

『ＯＫ。約束する。ひとりで無茶はしないから』

とかいいつつ毎回無茶をするヴェリテ。
学習しないよね、こういうところ↑おま

呼ばれている

～トルバラン街道にて～

『！　……？』

アル「どうかしたのか、ヴェリテ？」

『あ、いや…なんか何かに呼ばれてるような気がして…』

アル「何かって？」

『うーん…よくわかんない。でもあっちの方から聞こえるの…』

アル「あっちって…」

『タタール冥穴…』

アル「知ってんのか？」

『ううん、何となく…そう思ったの』

アル「ふーん…気になる？」

『ちょっとだけ。でも今は気にしてられないから』

アル「まぁ時間あったら行ってみたらいいんじゃねえ？」

『そうね。時間があれば、ね』

次の話（５１話）に繋がります＾ｐ＾

呼び方

〜トリグラフにて〜

『っう…』

アル「まだ痛むのか？」

『うん……』

アル「無理すんな…」

『ありがとう、アルフレド』

レイ「アルフレド！？ヴェリテってばいつからアルヴィンのこと本名で呼ぶようになったの！？」

『え、あ、いや、そのっ』

アル「昨日からだよな、ヴェリテ♪」

ロー「いやはや、おふたりもようやく、ですか」

エリ「ようやく…何ですか？」

ジュ「エリーゼは聞いちゃダメだよ」

ティ「なんでだよー」

ジュ「なんでも」

ミラ「ふむ。男と女の営みというやつを実行したのだな」

ジュ「ミラ！？」

アル「くくくっ、ミラ様は率直だねえ」

『っ行くわよ、アルヴィン！！』

アル「！？　ちょ、悪かったって！だから…、な？」

『……アル、フレド…』

アル「何？」

『……っ意地悪！』

ロー「飽きませんねえ」

レイ「見てるこっちがによによしちゃうんだけど」

エリ「ラブラブはいいことですよね！」

ティ「ラッブラブ～」

『あーもぅ余計頭痛くなってきた……』

アル「照れんなって」

『アルヴィン』

アル「ごめんなさい」

ジュ「扱い上手くなってるね、ヴェリテ」

ミラ「うむ。ヴェリテらしいな」

ヴェリテはツンデレっていうかクーデレなんじゃないかって思う←

心配性

～トリグラフにて～

ジュ「ねえヴェリテ、ちゃんと寝た…？」

『寝たのは寝たんだけど……その後がさ……』

ジュ「あはは……やっぱそうだよね……」

『心配してくれてありがとう。まぁきっと大丈夫よ。まだまだいける！』

アル「じゃあもっと愛してやればよかったかな」

『アアアアアルフレド！？』

ジュ「いつの間に……」

アル「俺も話に混ぜてくれよ♪」

『も、もう終わった！！』

アル「つれないなー」

ジュ「アルヴィン。大概にしないとほんとにぶっ飛ばすよ？」

アル「優等生はヴェリテの何！？なんで俺がぶっ飛ばされんの！？」

『ほんとお母さんってば心配性なんだから』

ジュ「お母さんじゃないからね！？」

『えー』

アル「ヴェリテには一生勝てねえ気がする」

『あは、そう？』

ヴェリテは口上手です、たぶん↑

可愛い

～ニ・アケリア　ミラの社にて～

アル「行きたいところって？」

『うん。まずは……ニ・アケリアに』

アル「…大丈夫なのか？」

『アルフレドが傍にいてくれるなら、平気』

アル「…んな可愛いことというんじゃねーよ」

『わ、わたしはほんとのことを言っただけよ…っ』

アル「もうお前の言葉一つ一つが可愛くて仕方ないんだけど」

『な、え、っ！？！？』

アル「ヴェリテの全部が好きだから」

『ぜ、んぶ、って…っ』

アル「そーゆーとこも可愛い」

『ア、アルフレドはいつもそんな余裕ぶって…っ』

アル「余裕なんてねーよ。俺はいつだってお前に触れていたいんだから」

『っばか』

アル「好き、ヴェリテ」

『…わたしも、好き……』

ラブラブラブラブ（＊ノノ）

もうアルヴィンはヴェリテに対して色々と歯止めが利かないと思う↑

気遣い

～ニ・アケリアにて～

アル「ヴェリテ…」

『アルフレド、気になってるでしょ？お母さんのこと』

アル「……」

『行きたいって、表情してる』

アル「…やっぱお前には分かるか」

『アルフレドってば何も言ってくれないから後回しになっちゃったけど』

アル「いや、嬉しいよ、ヴェリテ」

『良かった…余計なことしたんじゃないかって思っちゃった』

アル「気ィ、遣わしちまったか…」

『んーん』

アル「（…やっぱヴェリテも大人だよな……ま、そんなとこも好きなんだけど……）」

『ほら、アルフレド』

アル「え……」

『行こう』

アル「……ああ」

アルヴィンは隠していたけど、ヴェリテはずっとアルヴィンの想いを知っていたと思う。

どこに？

～ニ・アケリア　ミラの社にて～

ジュ「ヴェリテはどこに行ってきたの？」

『うーん、取り敢えずはバカ兄に会いに行って…――』

ジュ「イバルと会えたの？」

『うん。でもやっぱりなんか前とは違ってたかしら』

ジュ「…ごめん」

『やだ。ジュードのせいじゃないわよ。……あとはね、シャン・ドゥに行ってきたわ』

ジュ「あ…もしかしてアルヴィンの……」

『そ。お母さんのトコ。色々あったけど解決した感じ、かな…わたしはまだスッキリしないんだけど』

ジュ「深くは聞かないことにするね」

『ありがと。ジュードはどこに行ってきたの？』

ジュ「僕は取り敢えず自分の家に…そこでね、僕がリーゼ・マクシア人とエレンピオス人のハーフだってことが分かった」

『じゃあジュードが二つの世界の架け橋にならきゃ！…なーんてね』

ジュ「そうなればいいんだけど」

『そのためにもまずはガイアスを倒さないと』

ジュ「うん。なんとしてもガイアスは止めて見せるから」

『うん。みんなで、ね』

テイルズシリーズでハーフに偏見がないのって珍しいですよね＼（＾０＾）／

考え事

〜世精ノ途にて〜

『……』

アル「ヴェリテ、どうかしたか？」

『あ、ううん、何でもない…』

アル「そうか…無茶はすんなよ」

『分かってるって！（ねえ、ミラ。ミラはもしかして…）』

アル「飛び降りるぞ、ヴェリテ」

『へ、っきゃ…！』

アル「余所見してんなよ？」

『ご、めんっ』

アル「…別に言いたくなかったらいいけどさ、あんま考えすぎんな。いざとなったら俺のことだけ考えとけ」

『な、ん…っばか…！』

アル「冗談なんかじゃねぇからな」

『うん…ありがとう、アルフレド』

アル「よし、もう一息！」

『さあ、行こうか！』

ミラのやろうとしてることに気付いているヴェリテです。

その後のお話

こんにちはこんばんはおはようございます、作者の月詠輝夜です。

始まりました本編のその後のお話です。
ｈｔｔｐ：／／ｎｋ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ９１１９ｘ／

自営サイトでリクエストをもらったものを書いたり、書きたいものを書きます。
子供設定があったり。
時間軸はバラバラです。
たまーに裏夢も含まれたりします。
あくまでたまーに。

オリジナルなので
ゆっくりマイペース更新ですが、
良かったら見てやって下さいｍ（＿＿）ｍ

２０１１．１０．２５
月詠輝夜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0967x/

交わる無限の哀色世界〜テイルズオブエクシリア〜<チャット>

2011年10月25日19時21分発行